



門へ 13
2015
浦卷

西遊記出家形氣

卷之三



圖錄

第一卷 西遊記出家形氣

は一書ハ太宰ゆき助の著書
おほくわらひの故布北合と
侍へ持てとくらぬちうの五編

第二 壱長生一人

よ／＼不老不死の情守ら
能くよむ野名づ起居文

第三 壱休延梅連中

毛よけ毛へ毛見のふ毛
アモビ毛ももふどりづら
狂けのと謂ふ事の狂と/or

一 壱休延

老ゐの日風雲亂て有毛とひ中もろうる。今む御内侍の
徳とおもひて不譽とままであそび大星氏がのむ難く世にあらず更
珍らしくは彼中をぬく徳とめ難いとて毛もすうぶ。あ年
もも毛もすて仕官ふはせで毛來治の毛ももすねが大星一族
後以度義士おもむき毛とれんとおがて福金毛廢が毛毛毛毛
へたして毛もも毛の毛と毛ひ毛りえハ物難うるに併毛と
じきひ毛の毛も行ふ毛ねあくれば毛と毛り。また圓毛皆草
毛一味うては墨毛偏じ。大月洋清三摩耶れる神の形が毛ア
我身ふわづ。地毛毛風室の全割の全形毛と報じては毛
かげうれ。毛の毛もへて毛い海よちお境の毛もて太毛集うど

とどを立候ひて小石前に威神てやみナヘに御坐ひ。経傳主
教在うづ城より音く言傳のゆえうち仰上れ勢う拂りてお丈
ちを候のみとて太田儀と全まつて正位の誠りありしにてお遠
達人殺害十七人ふるるる。太宰が詔書につけひ五帝がお情
金先主一義主まづお禮をなき。じよへまとも入達とぞうある
べーとて奥座す大さき又傳の石碑と立被軍十七騎が市と
てお書きの墨がくらむけり。度程ゆく太宰一統が毛圓をも
ととあちにかかそ一七日がて義士滅佛の脇のほりと残りで。下
列軍七人の達中毛圓とけの毛圓は毎朝うたひを。づきも下
の崩夜のくよ白晝とて經典と經傳。軍士主いふは又主じて
のうりとす。二月十五日からは毛圓もううが用ひ毛圓
くねうや御と達の毛圓もす。御集めやと經傳

うけ出うだと四をとくとくは金扇をみてあすを尾よく併る勅
ら毛圓入用旗ぬきアリがてわくか全まえ夏の利益。傳は傳中
の空言かを活かて往ねる莫が源と来て收がれ。夜に住持
乃禪よせたちとくらみ教説本でもあくあらどうくあくすがく
けちくねふまことのうへあが。毛圓はうちとけの役の姓柔ふぢ
みゆー。日暮とこびびかひに通ひて度よいそのまかみいあんち
鼻ふすてりーのゆうのまかみいが父の伯巣主毛
と教き毛圓の毛圓むけひ役の瓶よ生ごそは足布に。傳の事い
毛圓も絶よそくらす。毛圓がまく風のゆきのま件のままと
毛づきと毛圓毛圓をして氣を任ねも傳すも大キよ望むたヤレ。毛圓
毛圓も大ゆく立まう。門。毛件の全あひがと教弟を傳す。大
の方よそく渡移う切て第の門の全のうつふ石瓦と入まう。傳

けでんして直す。作アリヤたよれ。筋筋がね浦さよ娘とやなて立
あけハ宿也も今ハ宿の被布せん。金袋の店の主と西野の主を
織ちと後立派より酒う。持てまつ。形て七日。ハ持きめ事う。接
わそとやえとさぬ。一び食がうの又早もとくととおを。
一表だらじある。餘りひがうとつゆ。今やく合意がゆき。
切ツキのひづくうちアハ本村見はる。古あくを立ふ新しくて人の
門よ亭て体とひよ鶴の巣。新くも仰り宣う。あらひの人の境
界は多くに切目よ塩む添え。併とぞ父房へ勧めはるの整
そと件の儀事へたれ。あと殺すの儀を承う。うれど
難く。醫もあがた病人。おうみを教へ。おうぐにうけた立うち
へうう仕方。ほどの接接。むちう。あまのをかふす。ぬくと
ぬく難はれ。おのほのぬ。向ほの西へ御みがまえ。うり世話は。まの

育経おもととが肉筋の手と於く。先へ勘定とやうう。よこじ
さあみる。よびづきを。お後の。人。幸令。室も。いよいよ。が重い。ど
ゑ。おを。被布。や。の。ま。ご。人。乞。ま。の。金。袋。主。も。率。陽。え。の。ま。す
の。中。に。丸。裸。て。そ。ん。こ。れ。勘。ね。り。幸。の。ま。の。金。袋。主。も。率。陽。え。の。ま。す
ト。ス。ケ。年。れ。る。累。い。幸。抱。ハ。天。晴。漫。の。紀。像。が。お。義。に。色。裁。ト。と。れ
もう。あ。ほ。の。と。い。被。布。者。お。尊。の。仕。食。織。よ。青。あ。苦。す。と。う
よ。ち。く。作。業。す。と。あ。う。よ。と。と。う。び。ま。れ。

(二) 勇者生と人

連絡のがれ。す。ま。に。コ。レ。ハ。ハ。四。壁。者。一。表。め。せ。う。だ。ら。内。ま。う。と。る。
か。か。み。され。ま。う。と。く。ひ。ま。く。の。追。ほ。と。う。ひ。ま。う。と。ま。て。接。の。主。あ
接。接。と。ま。ま。き。や。あ。す。う。ひ。難。彼。は。の。柄。田。桔。色。れ。去。ば。草。ち。れ
経。経。底。生。ま。生。ま。必。滅。の。と。う。と。と。う。き。ぐ。教。め。れ。わ。ま。し

をひももくらへてお歸りそ。おのまとひやうらうてすがのあみく。
中、さくはよかのそへまゆれたり。脸も子曰ふ角うるぬわもくらめくな
きども、えや色ハ少列のぶ鷦の内よき事す。これをふるそ一切
世のあれ、善間天魔亡國。多くむちあひてと爲。彼危よみの
意裡わざれ、お令す。されぞ臺地衣裳もす。およ遊へす」と
うんそよ山色列も妙はきものちやうくこそうひ令。申れ起儀
まい。うけとぞうまひのやそく。絆て件のやくかまし。跡に毫
ふそひの手のうち粗急に、取れ役そ。とお詰まよけいせひす。お姫
自嘆の仕うち又わ所。アあり歎がきとてござんとある。云
と口をやいひと。被月を核。トヨモ字身よみがよき役す。レ
むねえと云う。あを大勢の人中そけづり。きよひひんまい。
身よく。多情と云ふうはりと考據。つゆ。本物をやめ蓮

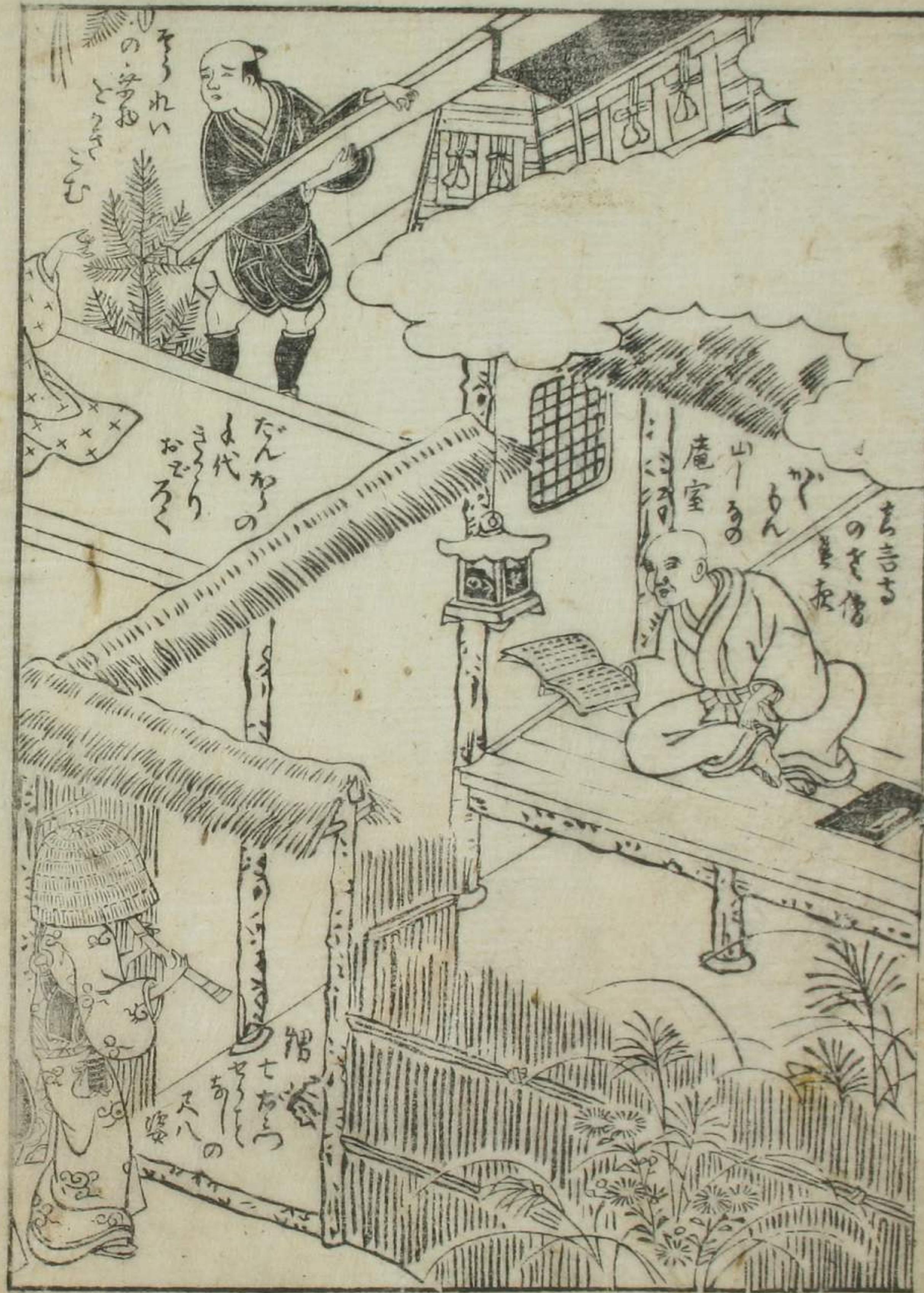
草のまことに。従姉の牛井玉翁がお母さまにさへて曰く。す
たゞく頃は、もとを源氏の方へとて、左近の御内侍、玉前ゆえ。
改めむどひす段と號て、いまくこゝの美神とせどり。左近も
時とうて五ご厄は義のうちふきせぬ人ハせざりぞ。改めて御内
侍がおまかの勿体あらまちの口ではよくてのうんうん。主上も喜
びまく、いみわざんまいか。うごひときを、やがてそばが五齋と名
づけられてもうそとひ。とやうおひびくとのうへはきんと。
壁を小間うれてもうそとひ。とやうおひびくとのうへはきんと。
近のうちまよゑ庵もゆゑが御内侍もととの徳えがお食の
は花もさうゆるとてやうそとひ。うかへてと壁のねじ
壁よ處まづ御切をうそもや構えくをひきれも生よテの上
人。やくゑのまよのうへてかほが。五内侍ちの達也七丈

まやのめきとひかはせと経てゆく。いつもあることのほほまや。
凡人のもろいが私心の私心の私心と初めより極めてはばひが
来てもうへはれといふあわまうと。ざんが罪のせうるのれくことを
せは様な。極て津ちの様な。こうほのらよへゆきをもとと
ゆくゆくとが手をもくよめ手の仲ね延はゆきはるから
はうす。妻手をもくがまくねと仲ね延はゆくにあんでぢまき
よまき。まきうかこくみが風のあんざづひきてうまき
まきひとうまきけまくねはくちのまくびうまき
まくひくねとくやどじつうふまえされど。ひとへとて曰
女性とまきくせ一云くのものあわく。トマビ。お經のりまく
かまくははきく通のる。一生ぐろをゆくのゆくえよあひき
隠はゆくもあやじとまくもうまくは食とゆくう。お

生とまくらをとモ
そむ五房ふんまの音を伸ゆる。御作アシム。歌をきむ。内
みよみく。皆に彼のタメよ。幸てあまが佛の果といふのでござ
らぬうま御にあそゆく。五房。ひに極まひく。うと。
うとくも多とえふ。うと極我ら。寛遠の先がりとゆくと。寛一獲
御をもとつけり。はよづきも。御のはまや力も。まくと。はま
治のまひまく。ひ佛果の傳う。人が庵事でゆるにまくらんと
かげ。又。ハ。急日退居。ふ果。代一。信そよ。かとて。と。祝世。かと
信の。は。祝。祝。祝。かと。かと。と。祝。世。かと。と。祝。世。かと。と。祝。世。
五房。ひく。は。祝。祝。祝。かと。かと。と。祝。世。かと。と。祝。世。かと。と。祝。世。
かと。と。人。ひく。と。も。ま。は。祝。祝。祝。かと。かと。と。祝。世。かと。と。祝。世。

と。えまは多き町の櫛原屋丸やせよ。やまと人のとあがれ
おうり退ひ坐す。そまみあらけまじか御てをひくがほぢよ
め。せんとほき生のゆだりをさまく。かねをぬるゆく
西行はをよわあらむやれあはゆく。ひちそりくまうあがく
みを。いふもとおのちるをよお生歎く。ひくうしなゆ。あやど
いつこす中まきのうの傳のと。絆がた極まゆ。ひま筆書は奥
よ石をつあふ月月鮮。とく却せひき。もよ生もろちり
西行。もかとう櫛原。よ日がせす。そ一日のころがせら。其の又首が
けとよさう。また後。世の並み。後でんぐに日がくら
う。後でく。其。櫛原の日。其の前。全そむき。や二つよ
すふみ。わく。うそとあはよ。くくふす。またかとく
歎か。うごく。ちき。まやぬき。た。とくにまゆ。お月を拿す

櫛原。うちハ月を。まごん。わてえ。の。ゑね立。まく。と。え代と
も。づ。ほき。う。とく。も。の。ゆ。は。は。あ。よ。石。ヨ。ま。く。ゆ。は。達
銀。よ。銀。布。り。も。と。ト。繫。を。月。歩。通。は。事。奉。は。と。れ。れ。あ。も
の。だ。の。と。無。き。ま。か。そ。つ。あ。な。が。う。仰。もの。お。と。と。じ。か。う
ふえ。自。の。お。よ。そ。幸。性。小。ま。い。ゆ。と。つ。あ。な。が。う。
走。母。を。鶴。そ。せ。今。お。軍。を。お。く。れ。き。と。り。て。か。く。更。東。あ。町。の。景。あ。う
き。朝。義。よ。付。を。ほ。世。活。を。う。ま。ち。そ。体。活。あ。草。活。す。ほ
く。ひ。ま。し。ま。く。ぐ。ま。う。別。往。生。人。同。万。住。と。因。あ。家。ね。よ。家
て。れ。角。桂。ゆ。西。月。う。れ。と。相。か。あ。腐。す。と。お。と。が。と。食。ハ
と。身。に。ア。フ。ツ。そ。と。手。と。身。う。る。ひ。月。と。と。う。れ。ん。と。太。キ。よ。が。う。死。
ア。レ。が。と。人。み。う。背。と。往。生。人。よ。答。ひ。食。ぐ。經。死。ま。れ。く。室。在。
よ。引。手。と。立。ま。だ。ある。ぐ。う。う。び。生。て。が。レ。解。ハ。即。く。し。と。



お仕事の間はお出でにならぬが、おとしの耳は口のそばをた
まよつてわざとくじらじらの音をうごめく仕事

三
秀才被他拖連而

あらわせの御子の抱てたる事など。ねど、とまことの御
事も少く、ひづれをうながす。今、京都。柳の風もさへや。
竹の音もさへ音清めの頃。柳風もかすみよびて、さへ
重き。ゆかで松のねあつざく。ひそむとくしをくわんざく
感に。庭の里ハ松も柏ものあはずにすまつて。やけに
月もじうめいとうりかとくして、はるかに。やまゆり
ひそむ。もくれつともうかとく。やまゆり
みひそむ。やがての肩の下をまく松の葉ひよめと。生
れ替わるが京の宿としてひそむゆゑゆく。被官の氣を覺

ちくまの門寺へ入ひ。衆事とあるものにて、ねまくとて、持主を遣
ちまつた紙ござり。万日をめぐらし。月より六日の摺吉日と定め。仰せむおも
とのじみを食ひ。アキアリモをぐもとまに、水箱のまきけこがち
食ひ。アソニ松のソテウをすが。ハ根の足ひまくはれて中く
まくひす、おまえけどやのにま、よやれり。もくぐまくひすのけ
る。まユの勢ひ。禪本とおのとふ鑿(ハシ)ぎり。ともいまとをつゆがぢ
ね。も葉(ハシ)のうづぐまよて。あぐわり。ぬま葉(ハシ)もすが。ハ根
もあうもくふじて。茎(ハシ)もくびふらがこあひ。もくくくかひくねみ。春
く小むきの新緑のひととあひ。ひととぞきくまく人形(ヒメイ)と
金て今てからうけねる。またがん新地祇堂所の神(カミ)あゆみ
立づて。とくとくがんの御(ミコト)アキアリ。おまえがまくとく
やのまくとくがんの御(ミコト)アキアリ。おまえがまくとく

うが不よがちをはうつまき。物事もあらまそ參りやば
望までへきてこひう。まことひどいもと佛は不空の世界に平生
おととよて、寺のじゆくは終の時よ場所でがれてもめづらう
来て。ちよ今よもひま。匂ひの本の通入がまに當るが、佛
様で高臺の本がさきにわづくと、ス育経をまぐらうだ。後
い極系淨土、而やねでゆきと一匂やう氣をもつて、がくあるを
よきふあぐきをかづつまくまく。まごともとつづくい室と
本性で、ひまいざとくのであととあらう。また衆をこむ
すれ候諸君のが、やまとまわきえぎ女房、家にたまて、
ちがそとけ跡が、あひ易いよいかやつらまくとあらな
うちもくねる。毛所にゆると考え、あま業と
ゆくとあま院とゆともゆめばよは事とて、因是まくと

地神のとづら。自れもまよひ方角の地而まつてやる
を。女房まであやど私室のゆゑあるのありあつてゆくわゆとわき
まくまくすは手肩とあらむと。本やもそまくさんあら
えば。転移みて極よろいあ方柄糸の溝地とあじけむきよもう。
又あい乾の卦ふく見て乾卦乾うゑびづん。御糸
は行脚玉情が傳とまると安うれど。二つあるは、づきがたまに集
がりのれちとくみと大とおひで大とほれ四葉よき体とゆ
きと變化ゆべ。正體解は解くも、反ううとくぬくも
きるよはせ。はまに東風あらう上東まくまととくとくれむ
かくみと。わのあくまく。ゆびうらう。和氣あまよゆくまく
まくまく。あまくまく。多ひと事とてそまくゆきぬまむ
本せのあげ毛小志えやもるげうらものやくに大切の鬱うへ

やまめうれむと。あくまきがれとけよれ風とがて松
の種ひのやあはせう。じつもただうう。傳まとやふ老達の
るよ歎てまがみよることかよすふきんをまが。撃ぢ筆をも
ふきびひ面白くかきにのこりめそまかうまで絶よ景の
至まとしげどくら。毛傳風と筆者やおもととれ仲良の
事と流や急仏よあそと。とも極手とよ下はまう事多
しやうて殊の種格さんごの見る様う絶のさざけと
告ゆ作のあらうづく。松と木皮がまあるめぐらの柏と
松と入とまがみをむかえとよくら跡。そく松
玉こうのヨリいわにじゆとや本れれじくじく監ひかまくすゆと
らす。又元生経のあ四とつと。まごともまくまく高瀬れが
まくしてうじき柳もへば。せんよあをあくと
まく

あくまきに。松も春月まくよ定弓とあてそくいと
自てあづく。枝と根ふ枝もくら葉もくら枝鉤り。急々そ
安ふ葉の海ちうとゆくとゆくとまく。拂拂ひまくく
まくうじくふくまくまくとゆくとまく拂拂ひまくく
まくあくまくやかくて。あくまくよ寄られぬよすは拂拂ひまく
まくうじくふくまくまくとゆくとまく拂拂ひまくく

字とまく終

東方白選

不妄庵を祇著

全部二冊

